

貧富の差は、国家間レベルでも、国家内部、地域内部、そして地区単位でも観察することができる。同じ構造はどのようなスケールでも観察できそうだが、家族内部の貧富の差という表現は使わない。観察単位のレベルとスケールの違いは異なった問題群を抱え込むからである。

小さな単位の厚い叙述を目指すマイクロスタディは大きな単位の「ドイツ研究」に何をもたらすのか。50年の歴史を有する家族史研究の成果から今後の展望を探りたい。

1 ミクロとマクロのあいだー経済史研究と家族史研究における50年ー

家族史研究は、50年近い研究史において、経済史研究との対話を行ってきた。その結果、前近代社会を「家族経済」の時代と規定するような単純な議論は意味を失い、それと共に、前近代的家族、ドイツ的家族あるいは日本的家族というような雑駁な議論をすることも少なくなった。しかし、「家族」と「経済」との関係が十分に議論されてきたかどうかというと、そうでもない。

これまでの家族史研究は、過去の家族のあり方に関する多くの誤った理解、一種の神話化されたような理解を、経験的知識の蓄積により打ち砕いてきた(Wakao, 1993, 1998)。たとえば、前工業化時代は大家族が支配的であったという大家族神話、工業化と共に核家族化が進行したという工業化神話などである。1960年代の多くの研究は、前近代社会の家族のあり方を十分に知

らないまま議論をしていることが多かった(Braun, 1960; Habermas, 1962; Egner, 1966; Brunner, 1968)。さらに、70年代に入っても、社会学者や人類学者は、当時はまだ十分に社会的に認知されていなかった社会史家や歴史人口学者の萌芽的な家族研究(Knodel, 1974; Imhof, 1977; Knodel, 1988)の成果を十分に吸収していない場合が多かった(Rosenbaum, 1974; Weber-Kellermann, 1974)。

またドイツの場合、アメリカ合衆国の歴史家に見られたような社会史的家族研究への傾斜は部分的にしか観察できない。アメリカ合衆国では、黒人の公民権運動、学生・青年運動、「ニューフェミニズム」という3つの解放運動と現実の家族をめぐる激しい議論や運動がそのきっかけとなった。とりわけ、タマラ・ハレヴン Tamara K. Hareven (Hareven, 2000)を中心にして新しい学術雑誌が刊行されるまでの過程そしてその初期の沸き立つような雰囲気は、新たな学問的潮流の創成期の力強さを感じさせた。多くの神話の打破と間違った理解の仕方に対する痛烈な学問的挑戦が行われた。1975年に、「Journal of Family History」が刊行され、さらに1995年には「The History of the Family」が刊行された。それに匹敵するドイツ語圏の雑誌としては、1975年以来、ビーレフェルト学派を中心に刊行されてきた「Geschichte und Gesellschaft. Zeitschrift für Historische Sozialwissenschaft」、さらに1993年以降は、ウィーン大学を発刊場所としてきた「Historische Anthropologie. Kultur-Gesellschaft-Alltag」が

挙げられる。「家族」という特定の認識対象から学術雑誌が産み出されるアメリカ合衆国における学問的環境と、社会科学への志向、人類学への志向というアイデンティティによって、学術雑誌が刊行されたドイツ語圏のそれとの違いは大きい。

ユルゲン・コッカ Jürgen Kocka (Kocka u.a., 1980) やヴェルナー・コンツェ Werner Conze (Conze, 1976) などを中心に編纂された研究や数度にわたり研究史的概観が行われた“Geschichte und Gesellschaft”なども家族史研究に貢献した。テュービンゲン・グループの村落研究 (Jeggel, 1977; Jeggel / Ilien, 1978; Kaschuba / Lipp, 1982) や、ユルゲン・シュルムボーム Jürgen Schlumbohm、ハンス・メディック Hans Medick、ペーター・クリーテ Peter Kriedte というゲッティンゲングループの研究者の貢献 (Medick / Schlumbohm / Kriedte, 1977) も大きい。

さらにウィーン大学のミヒャエル・ミッテラウアー Michael Mitterauer を中心にしたグループの研究蓄積はドイツ語圏とその周辺の家史研究に多大な進歩をもたらした (Mitterauer / R. Sieder (Hrsg.), 1977; Mitterauer, 1979, 1983, 1986; Mitterauer / Sieder (Hrsg.), 1982; Gremel, 1983; Mitterauer / Ehmer (Hrsg.), 1986; R. Sieder, 1987; Mitterauer (Hrsg.), 1987; Lüdke, 1989; Mitterauer, 1990, 1992; Ehmer u.a. (Hrsg.), 1997; Institut für Wirtschafts- und Sozialgeschichte, Universität Wien (Hrsg.), 1997)。しかし、ドイツ語圏全体の歴史研究を見渡した時、それらはあまたある研究グループの一部でしかないことも明らかである。大部分はオーソドックスな一般史研究家であ

る。社会史、家族史、経済史など個別の歴史研究は、一般史研究とは別の存在として位置づけられ、また、個別の研究領域間では、相互の対話が十分になされてはいない。家族史研究が一定の成果を示し、成熟期に入った現在においては、一般史や他の個別学問領域との新たな対話の可能性を見ることができるとも、社会と家族、社会と経済あるいは家族と経済というような曖昧な概念の間に客観的な関係があると考えることが間違っているのかもしれない。

オットー・ブルンナー Otto Brunner 「全き家」(Das ganze Haus) に関する主張 (Brunner, 1968)、つまり、ある一定の時期に「家族経済」の時代が存在したことを前提に、家父長的社会を伝統的社会と規定した議論は、社会史研究サイドから痛烈に批判された (Trossbach, 1993; Groebner, 1995; Opitz, 1994; Derks, 1996)。多くの経験的な研究は、その主張が事実と反することを証明した。しかし、ブルンナーが本来問題にした「経済」の意味変化については、議論の進展が見られなかった。

また、経済史と家族・人口史を接合するプロト工業化論 (Proto-industrialisierung) の議論も基本的には特定の地域システム内での変数の相関関係を問題にしていたに過ぎない (Mendels, 1972; Leboutte, 1986)。婚姻率と価格変化率など「家族」と「経済」を代表させる諸変数において、その相関関係を分析する視点は正確な分析的議論を発展させた。しかし、それがマクロの構造機能主義的相関分析に終始する限り、地域単位そのものが分析対象になることは不可能となり、それらの変数が動く地域的範囲、フィールドは不明なままで終わった。

後に述べるように、観察対象もしくは分析対象であるフィールドは一般史、とりわけ所有権と権力関係の議論との関係においてのみ明らかにされるからである。

いずれにしても、家族や地域を独立した変数で理解することには限界がある。つまり、フィールドを確定する要素が不明なまま、フィールドの特徴を代表する変数を問題にするマクロ分析には限界がある。また、家族や経済を単独に取り上げることにも限界がある。研究の初期段階における誤った認識の是正や新たな事実を提示する上では、家族を、独立した単位として議論することは意味があったが、家族史研究が十分成熟した段階においては、標準的な研究は蓄積され続けるとしても、60年代70年代のように新たな研究の胎動を画期づけるような研究はもはや登場しえない。

一般史と個別の歴史との対話を実現する上で、対象地域の範囲を限定したマイクロヒストリーの有効性を指摘しておく必要がある。見渡しうる範囲で可能な限り多様な実態を盛り込んでいくためには、フィールドをかなり絞り込む必要がある。ドイツの地域史として定着している”Landesgeschichte”でも対象は大きすぎる。一村落、一市街区を対象とするような緻密な研究が、分断された一般史と経済史や家族史のような個別の歴史との対話を可能にする。実際、この方向での研究蓄積もすでに膨大なものになっている (Wierling, 1987; Sabean, 1990; Harms-Ziegler, 1990; Murayama, 2001; Gleixner, 1994; Kriedte, 1991; Pfister, 1992; Beck, 1993; Schlumbohm, 1994; Dürr, 1995; Medick, 1996; Medick / Trepp (Hrsg.), 1998; Krusentjern / Medick (Hrsg.), 1998;

Greyerz / Medick / Veit (Hrsg.), 2001; Cerman / Zeitlhofer (Hrsg.), 2002; Fertig, 2003; Duhamelle / Schlumbohm (Hrsg.), 2003; Iida, 2003; Medick / Schmidt (Hrsg.), 2003)。家族史研究が新たな段階に入りつつあることは明白である。

マイクロヒストリーとマクロヒストリーとの関係については、社会学においても、また、政策科学においても、理論的な考察がなされている。本稿は理論的な考察を課題にしてはいないが、議論の焦点は、ミクロとマクロのリンクに集中していることである (Murayama, 1990b; Medick, 1996; Schlumbohm, 1998; Frumkin / Kaplan, 2000; Veichtlbauer, 2004)。上記で概観してきた近世から近代にかけての家族史研究の分野でも同様である。理論的考察はともかくとして、これまでの家族史研究と経済史研究との対話において確認されたことは、家族は、国家、集団そして個人の計画と行為における無数の連鎖の集合体であり、家族内部においても、家族の外部においても、自ら計画を実行する主体のみが、その活動の場、フィールドを確定するということである。そこで次に、そのフィールドを確定する諸要素を具体的に見るために、報告者自身の研究の一端を紹介したい。

2 フィールドを確定する要素

最初に注目したいのは1566年に描かれたというピーター・ブリューゲル Pieter Bruegel の絵画である。16世紀のヨーロッパの画家たちは、古代からの宗教的な話題を絵の題材として使っている。十字架上のキリストなどは再三再四描かれたテーマである。しかし、多くの絵画は、当時の社会

の実態を伝えていない。ところが、オランダの画家たちは例外であり、日常生活をしばしば題材として絵に取り込んでいる。彼らは、重要な人物以外にも、農夫、農場労働者、手工業者、子どもたち、家や村の様子を描いている。

ピーター・ブリューゲルはその中でもとりわけ多くの有名な作品を残している。1566年の「ベツレヘムの国政調査」Die Volkszählung zu Bethlehemなどはその典型であろう。ロバに乗ったマリアも描かれているのであるが、多くの写実的な描写の中で目立たない存在となっている。古代には一種の国政調査が存在した。しかし、その後、中世期に歴史上の空白があり、人口もしくは住民を調査するという管理的行為の新たな歴史が開始されるのは16世紀である。ブリューゲルの絵画は、実に巧みに、微細なミクロスタディとマクロヒストリーの統合に成功しているのである。

(1) ミクロ的フィールドのマクロ的把握

ここから、かなり小さな対象に議論を絞り込む。対象とするのは、現在のノルトライン・ヴェストファーレン州に位置するヴッパータール Wuppertal である。現在はひとつの都市になっているが、問題にする当時は、複数の行政区に分かれていた。そのため、ここでは、現在の都市ヴッパータールではなく、ヴッパー溪谷 (Das Wuppertal) をさしあたりの地域名として使用する。また、特に取り上げるのは、ヴッパー溪谷の二つの中心地であるエルバーフェルト Elberfeld とバルメン Barmen である。バルメンは、フリードリッヒ・エンゲルス

Friedrich Engels の出生地として有名である。なお、本稿は、著者の最近の研究 (Murayama, 1990a, 1995, 1999, 2003, 2004) の一部を紹介するものである。

地域社会 (Lokale Gesellschaft) を問題にする時、まず人口がどの程度なのかということが最初に問われる。ヴッパー溪谷の人口はどの程度であったのか。ヴッパー溪谷全体、とりわけ現在の都市ヴッパータールの人口について正確な数値が得られるのは、1929年に個々の独立した行政単位が統合されてからである。個別の行政単位の正確な人口については、バルメンの1698年の人口調査 (Haacke, 1911)、都市エルバーフェルトの場合は1703年の人口調査に基づく数値が最も古いものである (*Verzeichniss*, 1702/03)。集計量としての人口数が明確になるのは、この地方では、17世紀末以降ということになる。ヴッパー溪谷が属するベルク公爵領 Herzogtum Berg のすべての行政単位について、初めて、統計的な数値が整理されたのは、さらに時代が下って、1792年のことである。そのため、エルバーフェルトとバルメンという二つの中心地の数値を合わせると、24,872人という細かな数値を得ることができる (Wiebeking, 1793)。

中世末期から近世後期にかけての時代には、ある領域国家 Territorialstaat の人口数を総体としてマクロ的に観察するということはなかったのである。ドイツ語圏でこのような数値が整理されるのは、18世紀後半になってからである。そもそも集計的なマクロ的観察を行うということ自体が存在していなかった。マクロ的観察に慣れている現代の人々は、近代以前の社会を観察

する時にも、まずマクロ的な数値を確認しないと落ち着かないだけである。

つまり、一つの地域単位を総体として把握する方法として、集計量を問題にするのは現代に特有の傾向であり、それ以前の社会においては、ある地域単位をフィールドとして確定する要素は異なる。ブリューゲルの描いた国勢調査の絵は、「国勢調査」に慣れている視点から見た時には、誤った解釈をすることになる。ハプスブルク家スペインのオランダへの重税がその絵の背景にあった。フィールドを集計量で把握するマクロ的観察は自明の前提ではなかった。

だからといって、当時の社会がマクロ的に観察されていなかったかというそうではない。統計数値で表される集計量的な把握ではなかったということに過ぎない。近世社会では領主と領民との関係がマクロ的把握を成立させた。たとえば、ヴッパータールが一つのフィールドとして、最初に認識されたのは、そのフィールドの住民に対して、領主による独占特権が付与された時である。特定のフィールドで展開されていた撚糸漂白業という生業に対して、その領民が861グルデンという金額を支払うことによって、領主は、1527年に、領邦国家内での生産と営業の独占特権を付与した(*Privilegium*, 1527)。フライハイ特 "Freiheit" (一種の都市特権) キルヒシュピール "Kirchspiel" (教会の教区) そしてアムト "Amt" (農村の行政単位) が当時把握されていた行政単位であり、エルバーフェルトは、市場権のような都市特権の一部が与えられていたフライハイ特と農村的なキルヒシュピールという二つの地区から構成されていた。バルメンは、アムトとしては一

つの行政単位ではあったものの、ヴッパー川上流のオーバーバルメン Ober-Barmen と下流のウンターバルメン Unter-Barmen は、それぞれ別のキルヒシュピールに属していた。これらフライハイ特・エルバーフェルト、キルヒシュピール・エルバーフェルトそしてアムト・バルメンという三つのフィールドの住民は、領主との主従関係において、生業の独占特権という生業と経営の占有権を獲得した。そのことによって、この三つのフィールドは、地域的に単一のマクロ的単位、一つのフィールドとして明確化された。というのも、それまでに存在した教区や裁判管区という単位ではなく、共同経済的な単位が初めて場所性を確定したからである。

(2) マクロ的フィールドのミクロ的変化

撚糸漂白業という独占特権は、特定のフィールドを一つの単位としてマクロ的に把握したものであるから、その独占特権を巡って、ヴッパータール全体をフィールドとする史料が残された。そのフィールドの住民は、独占特権と共に生業に関係する自治組織を作る権利を獲得しており、生業の維持のための規約などを制定する権利が与えられたからである。その規約や規定の歴史的变化は、小さなマクロ的フィールド内のミクロ的変動を示している。

1527年の特許状では、特権が付与された経済主体は、"Haußmann" (家長) であった (*Privilegium*, 1527)。その後、1608年の規約 (*Garnordnung*, 1608) では、その表現が変化し、"Garnnahrungsverwandte" (撚糸生業身内) となり、1698年には、

表1：1738年におけるリボン織り工・麻織り工・漂白人

地区 (Rotte)	リボン織り工			麻織り工			漂白人		
	総世帯数	相続人	%	総世帯数	相続人	%	総世帯数	相続人	%
West	15	7	46.7	7	1	14.3	0	0	*
Loh	13	3	23.1	3	0	0.0	4	3	75.0
Leimbach	19	6	31.6	2	1	50.0	2	2	100.0
Hatzfeld	2	0	0.0	0	0	*	0	0	*
Westkotte	16	10	62.5	1	0	0.0	6	4	66.7
Wichlinghaus	12	4	33.3	2	0	0.0	3	2	66.7
Wülfing	21	2	9.5	0	0	*	9	3	33.3
Heckinghaus	19	3	15.8	1	0	0.0	7	4	57.1
Cleve	30	6	20.0	5	0	0.0	6	4	66.7
Bruch	16	2	12.5	1	0	0.0	5	0	0.0
Aue	17	4	23.5	12	0	0.0	7	1	14.3
Höchste	*	*	*	*	*	*	*	*	*
Gemarkte	11	1	9.1	3	0	0.0	9	2	22.2
計	191	48	25.1	37	2	5.4	58	25	43.1

史料：Gewinn- und Gewerbesteuerzettel (Stadtarchiv Wuppertal FIV 12)

”Handelsgenosse”（商業仲間）という表現に変わっている（*Garnordnung*, 1698）。近代以前の農業社会ではおそらく一つの世帯単位が領主から把握される経済主体であったのであろうが、一定のフィールドへの経営独占の特権付与により、住民全体が共同経営を営むことになり、16世紀の間にそれが定着したということである。しかし、その後、30年戦争を経て、共同経営的経済というよりも、商業的な利害共同体へと変質していることを示す。

撚糸漂白業では、芝生地などの土地所有や水利権などが、生産に欠かせない。また、その生産と販売は、フィールド内部向けではなく、外部向けの生産であるため、商業活動がより多くの利益を産む可能性があった。その結果、土地など必要な財産を相続し、さらに、商業活動を展開した特定の集団が、その特許状の権利を代弁するようになっていった。フィールド内での土地・財

産などの相続者と非相続者との区別が明確に進んだ。

撚糸漂白業だけではなく、それに伴った種々の繊維産業が展開し始めると賃労働だけで生活を支える者と旧来からの種々の物品を相続していた階層とが明確に分かれていった。バルメンに関する表1に見られるように、漂白人（Bleicher）においては、土地や家屋を相続しているものの比率が高いが、麻織り工（Weber）などは、ほとんど相続すべきものを有していない。リボン織り工（Wirker）はその中間に位置している。

さらに表2を見ると明らかなのは、営業税（Gewerbe- und Gewinnsteuer）を支払っている住民の内、何らかの形で、土地や家屋を相続している、相続人（Beerbte）と称された者は、1643年では、営業税を払った159人の租税納入者の内、94人で、59.1%を占める。それに対して、1738年で

表1：1738年におけるリボン織り工・麻織り工・漂白人

地区 (Rotte)	1643年			1738年		
	相続人	租税納入者 (商工業者)	%	相続人	租税納入者 (商工業者)	%
West	1	6	16.7	9	25	36.0
Loh	10	11	90.9	6	30	20.0
Leimbach	*	*	*	(16	29	55.2)
Hatzfeld	*	*	*	(1	23	4.3)
Leimb.+Hatzf.	8	9	88.9	17	52	32.7
Westkotte	10	15	66.7	16	63	25.4
Wichlinghaus	12	17	70.6	23	65	35.4
Wülfig	6	10	60.0	0	56	0.0
Heckinghaus	8	11	72.7	12	42	28.6
Cleve	9	22	40.9	14	63	22.2
Bruch	8	12	66.7	5	37	13.5
Aue	11	19	57.9	5	47	10.6
Höchste	2	4	50.0	*	*	*
Gemarke	9	23	39.1	3	90	3.3
計	94	159	59.1	110	570	19.3

史料：Gewinn- und Gewerbesteuerzettel (Stadtarchiv Wuppertal FIV 12)

は、営業税を支払った570人に対して、土地や家屋などを相続している者は110人であり、19.3%となっている。土地や家屋を相続することのできる階層とそうではない階層との比率の大きな変化であるが、このことが意味することは、このフィールドではもはや土地の所有を問題にした観察では、一部の階層しか把握できなくなっていることを示す。

この時期はまた、家族構成においても、新たな変化を観察することができる。単身者世帯比率が増加し、下男や下女を抱える世帯の比率が減少し、そのことにより、フィールド全体としては、世帯規模も減少している。土地や家屋を有した世帯よりも、外部から流入し、賃労働でのみ生計を立て

る世帯の比率が急速に増加した。市場経済の進展に伴って、土地や家屋という財産に基づいて住民を把握しようとしても、とても全数把握ができない状況へ変化したのである。

(3) マクロ的フィールドに対する認識論的变化

17世紀末には、ヴォーバン Sebastien de Vauban、ペティ Sir William Petty、グラント John Graunt そしてキング Gregory King などが統計的な人口把握の重要性を示していた。しかし、バルク地方での住民把握は、体系的な国勢調査の住民把握がなされる1792年までの間、常に断片的なものでしかなかった。

社会の総合的認識の方法としては、統計的把握以外にも様々な傾向が存在した。1869年に『フランス史』というマクロヒストリーを書いたジュール・ミシュレ Jules Michelet に多大な影響を与えたジャン・バッティスタ・ヴィーコ Giambattista Vico が「人は自分でつくったものだけを認識できる」と述べる『新しい学』の初版を出したのは1725年である。イタリア人ヴィーコは、17世紀末のヨーロッパで展開された社会認識に関する統計学的方向とは別の路線で社会把握のあり方を提示した。この路線が社会史研究の源流と理解される場合がある (Matsumura, 2003)。同種の議論がドイツで幅広く展開されるのはさらに先のことであった。ジュスマルヒ Johann Peter Süßmilch の『神の秩序』Göttlicher Ordnung が1741年、アッヘンヴァル Georg Achenwall の『新国家学概論』“Abriß der neuesten Staatswissenschaft” が1749年の出版になる。

このような認識論的転換と同時に、ドイツ語圏の領邦国家において、相次いで国勢調査的な人口調査が行われた。最も早くに国勢調査が導入されたのはやはりプロイセン Preußen であり、1725年のことであった。2番目に古いものは、1731年におけるカッセル Kassel、そして、1742年には、ヘッセン・ダルムシュタット Hessen-Darmstadt、プファルツ・ツヴァイブリュッケン Pfalz-Zweibrücken などの領邦が続く。ドイツ語圏全体のそのようなマクロ的観察が広がるのはその後のことであった。それは18世紀後半であった (Bulst/Hoock, 1981)。

国家が住民を把握しようとするのは、徴

税と徴兵目的であることが自明のこととされている。それは、原則としては誤りではない。しかし、為政者の側の住民把握の目的としては、徴税・徴兵とは別に、住民の保護がその対極にある重要な事由であることも忘れてはならない。そしてさらに、それらの目的のために、体系的な集計量的把握が必要であるという認識が展開されるには多くの時間を要した。マクロ的認識の発達は特有の歴史を有している。

集計量的マクロ的認識が一般化する以前の時代においては、住民台帳は断片的に残されるだけである。都市エルパーフェルトの最初の住民台帳は、1703年のものである。この住民台帳は、1687年における大火災を契機に作成された (Kollekte, 1687)。この大火災において、都市は、5軒の家を除いて壊滅した。幸い死傷者はそれほどでもなかったのであるが、地方社会におけるダメージは莫大である。領主は、臣民と住民を保護するために、25年間、そのフィールドでの租税を免除することにした。多くの住民が周辺からも流入し、都市の復興が急速に進行した。25年を経過した後、領主は詳細に住民を把握した。

その把握の理由が徴税・徴兵目的かという点、事態はそれほど単純ではない。プリーユゲルが描いたような国勢調査が実行されるために、住民は臣民として領主に恭順を示す必要がある。もし、徴税・徴兵だけを目的に領主が威圧的に調査しようとしても、自分たちの利益にならない限り、住民は隠れるだけであろう。人口調査は、プライバシーへの介入の問題として、イギリスなどでは、住民の抵抗は一層強かったことが指摘されている。ドイツ語圏でも事情は

大きく変わらない。領主の保護や新たな特権付与などの大義名分がなければ、そのような調査は実行できない。

エルパーフェルトの場合も同様であった。エルパーフェルトでは、フライハイトというレベルの低い都市特権のみを有した時代の後、1610年には、より拡大された都市特権を獲得し、都市と呼ばれるようになっていた。市場権はフライハイトの時代にも得ていたのであるが、1610年、新たに徴税権や防壁を建設する権利などを獲得した。しかし、裁判特権は獲得していなかったのである。1703年に、一つ一つの住居を単位として、各世帯に関する詳細な都市住民の調査がなされた。その後、数年後の1708年に、エルパーフェルトは裁判特権を獲得し、名実共に自立的な都市としての地位を得ることになる。裁判特権獲得までの経緯について、十分な史料が発見できてはいないが、特権獲得を巡り都市民と領主の間には当然何らかの攻防があったのであろう。その一環として、住民台帳の作成がなされたと推察できる。というのも、裁判権獲得との関係で、市民権を有した「市民」を改めて確定し、他の住民と区別する必要があったからである。新たな権利を獲得できる「市民」は従順に住民調査に応じたと考えられる。

バルメンの1698年の住民調査においても、領主との関係、それも領主の保護目的がその前面に出る形で調査がなされている。調査をするにあたって、領主は、近年の経済的な危機状況において、それぞれの世帯が、穀物などをどのように備蓄しているかを把握することを目的にして、おおまかな年齢区分の上で、家族構成も調べている。

つまり、危機対応への国家の役割の下で調査が行われた。この路線は、その後、1745年から46年にかけての住民調査でも維持される (*Conscriptio*, 1747)。住民台帳には穀物の消費や備蓄などが書き込まれている。しかし、この住民台帳に基づいてなされた租税徴収には、領邦国家と領民との間に新たな交渉関係が生じていたことが判明した (*Ausschreibung und Repartition einer Capitationssteuer*, 1745/52)。というのも、租税を納めたバルメンの住民は、税を支払う代わりに、バルメンの住民全体の徴兵免除を獲得したからである。この税を支払ったのは一部の上層住民に限られたのであるが、すでに多様な繊維産業が展開していたバルメンにおいて、徴兵において人を集めるよりも、生産と商業の継続による租税収入の方が、領邦国家にとっても利益があったのである。領主の徴税・徴兵目的に住民台帳が作られたというのは、その意味でも単純な理解に過ぎないことが分かる。このような事柄は、小さな地域単位を問題にするマイクロスタディからしか得ることができない知見である。

以上で概観したような歴史資料の存在を問題にする比較史研究はまだ端緒に着いたばかりである。これまでの歴史研究は基本的に歴史資料に書かれた事柄を解読・分析してきたが、歴史資料の存在そのものの歴史を書くことはほとんどなかった。後者の視点から、ヴッパー溪谷に残された18世紀中ごろまでの住民台帳などの史料を比較史的に読み解くことによって、国家が住民把握をしようとした意図と住民の意思との相互関係を明らかにすることができた。

18世紀後半になると、領邦国家の領域

全体を人口学的に把握することは当然のこととして理解されるようになる。主従関係によるマクロ的把握が集計量的なマクロ的把握へ転換するには、ヨーロッパ内でも紆余曲折があった。ただ、いずれにしても、領民と領主の関係だけではなく、ヨーロッパで、また世界規模での市場経済の進展により、領民内部の関係においても、相続者と非相続者の区別という大きな階層変化が起こった。その結果、領域内住民を総体として把握するためには、集計量的なマクロ的把握が必要であるという認識論的転換が加速化されたと考える。もっとも、計量経済学的な集計分析が本格的に展開するのは20世紀以降であり、さらに100年の歳月を要した。

3 「ドイツ研究」への展望

マイクロスタディとマクロスタディとの関係は複雑である。社会科学の最終目標が、政策提言を行うことであるとするならば、現在の政策課題の大部分が国家を単位にしている状況では、社会科学的な歴史学研究的提言も、「国家」に向けて一般化せざるを得ない。現代の社会は、近代以前の社会と比較するならば、国家の役割が非常に大きい。市場経済化、競争社会の実現があらゆるところで主張されている現状であるが、国家の役割は小さくなるどころか、ますます大きくなっている。

マイクロスタディが主張するのは、個々の研究成果をそのような目的に合わせて、マクロ的叙述に収斂させることではないし、多数のマイクロスタディをケーススタディとして集めることによって、マクロ的叙述が可能だということでもない。国家を単位に

してもマイクロスタディはあり得る。フィールドワークという意味ではどのような場も研究対象になりうるからである。というのも、行為主体がある計画を立てることによって時空間が設定され、設定された時空間のみが認識の対象になるからである。それゆえ、計画を立てる行為主体への着目の仕方によって、フィールドの範囲が変わる。

見渡しうる小さな範囲で集められた情報と帰結は、より広い範囲で一般化できるのかという代表性を問題にするのが、古典的なマイクロマクロ問題の議論である。自然科学、社会科学そして人文科学というあらゆる学問分野でマイクロマクロ問題が議論されてきた。しかし、マイクロマクロという区別において、二つの次元のみが存在するように整理されてはいるが、そのような整理は認識対象の明確化と分析的道具の獲得のための便宜的な基準でしかない。ただ、スケールの違いによって、時間的には、短期、中期、長期、空間的には、個人空間、住居、地区、市町村、州・県、国家、アジア・ヨーロッパなどに区分されるが、時間が抽象的な単位で把握できるのに対して、空間は、そのような抽象的な表現ができないことに注目する必要がある。それは、空間の単位は、人類の影響が及ぶ範囲内において、すべて人類の創造力と関係しているからである。とりわけ、所有権に関係する要素が、フィールドの範囲を確定するというのが、本報告の主要な主張である。

その意味で、ドイツ連邦共和国という空間的単位だけがドイツ研究の対象ではないとしても、国家の保障が所有権を正当化する限り、国家が、フィールドとして、最大の研究対象であることは当然である。しか

し、「ドイツ研究」は自らの空間的単位を現在の国家単位に限定する必要はない。ドイツ語を話す人々、ドイツ語を知っている人々、ドイツ人を知っている人々、ドイツ人と記憶を共有する人々、これらの人々の詳細な観察が、ドイツのマクロスタディである。そのような微細で緻密なフィールドワークによって、これまで見過ごされて来た側面や要因を発見することができる。マクロスタディの効力は、見渡しうる小さなフィールドに分析対象を絞り込むことにより、持続的に新たな視点を発掘することにある。

フィールドとしてのドイツが、国家の枠を超えて、広範囲の議論や普遍的な議論を引き起こすことができるかどうか、つまり、フィールドの道具化が成功するかどうかの問題である。観察者独自の明確な視点が重要であると共に、とりわけ、観察される対象自体、つまり観察対象である多様な主体が独創性・独自性を持っているかどうかの問題になる。もっとも、この独創性ならびに独自性は他者との比較において初めて明らかにされるものであり、マクロスタディに基づくフィールドワークは常に比較史の視点を持つ必要がある。時代や地域を超えて、適切な小さな単位を分析対象のフィールドとして直接比較することによって、結果として、国家間の比較も討議できる。しかし、国家間の比較が最終目的ではない。

小さな単位の個別のフィールドワークから得られた経験的証拠がドイツ全体を代表するかというような設問は二つの点で古い。というのも、第一に、現代において、ますます大きな期待がかけられる国家であるが、様々な側面において、国家レベルでの単一

の方策では、十全にその役目を果たすことができなくなっているからである。現代国家は、あらゆる側面で、空間レベルで重層化した複雑な問題を抱え込んでいるからである。その意味で、マクロスタディもドイツ全体への代表性にこだわる必要はもはやない。また、マクロスタディという方法に基づくフィールドワークが成功したかどうかを判断するのは、提示できる多様な論点が、さらに新たな視点の発掘を可能にするかどうかにかかっている。つまり、新たなドイツが持続的に発見できるかどうか、ドイツ語圏をフィールドとするマクロスタディを評価する基準になる。

第二は、マイクロ分析的な家族史研究自体の問題と関係する。以前、ユルゲン・コッカが“Neigung zum mikrohistorischen Klein-Klein”と批判したように、マクロスタディは、塵のような細かな研究に終始する傾向を認めない。一つの論文としての個別研究は、それだけでは十分に議論を展開できなくなっている。家族史研究を代表する“The History of the Family”という雑誌では、ほとんど毎号、「ヨーロッパ地方社会における移民」、「思春期の歴史」などというように特定の論点 Issue に基づく特集が組まれている。世界中の異なった地域や時代を扱ったローカルスタディを集め、マクロヒストリー的な概観を行う論文を加えて、雑誌上で論文集が組まれている。ここでは、国家や地域は、それ自体を明らかにする対象ではなく、普遍的な論点を討議するための道具であり、分析対象としてのフィールドであることが優先される。もちろん、それらの特集には、ドイツ語圏を対象とした研究も多く含まれており、ドイツが

討議する価値のあるフィールドであることは明らかである。このことは、ドイツを語るために、ドイツを問題にしなくとも、ドイツが語られうることを示している。つまり、最近の家族史的なマイクロスタディは、討議する論点を中心に多様な地域研究の共同作業が進められることが、今後も大切であることを示唆している。

文献目録：

1. Original sources

- *Ausschreibung und Repartition einer Capitationssteuer 1745/52* (Stadtarchiv Wuppertal FIV 22).
- *Conscriptio Familiarum Barmensis 1747* (Stadtarchiv Wuppertal AV 3)
- *Die Garnordnung vom 19. Dezember 1608*, in W.Crecelius und A.Werth (Hrsg.), „Urkunden zur Geschichte der Garnnahrung im Wuppertale.“ *Zeitschrift des Bergischen Geschichtsvereins* (Bd.16, 1880): 83.
- *Die Garnordnung vom 25. März 1698*, in W.Crecelius und A.Werth (Hrsg.), „Urkunden zur Geschichte der Garnnahrung im Wuppertale.“ *Zeitschrift des Bergischen Geschichtsvereins* (Bd.16, 1880): 89.
- *Gewinn- und Gewerbesteuerzettel* (Stadtarchiv Wuppertal FIV 12).
- *Kollekte nach dem Brand von 1687* (Archiv der Ev. Reformierten Gemeinde Elberfeld III A7-1.1.)
- *Privilegium des Herzogtums Johann und der Herzogin Maria zu Cleve-Jülich-Berg u.a. vom Jahre 1527 für die Elberfeld - Barmer Bleichereien*, in W.Crecelius und A.Werth (Hrsg.), „Urkunden zur Geschichte der Garn-

nahrung im Wuppertale.“ *Zeitschrift des Bergischen Geschichtsvereins* (Bd.16, 1880): 79.

- *Verzeichnis der in Elberfeld ansässigen Familien 1702/03* (Stadtarchiv Wuppertal AV29)
- Wiebeking, E.F. 1793. *Beiträge zur Churpfälzischen Staatengeschichte vom Jahre 1742 bis 1792, vorzüglich in Rücksicht der Herzögtümer Gülich und Berg, gesammelte vom E.F.Wiebeking*. Heidelberg/Mannheim.

2. Literature

- Beck, Rainer. 1993. *Unterfinnig. Ländliche Welt vor Anbruch der Moderne*. München.
- Braun, Rudolf. 1960. *Industrialisierung und Volksleben. Veränderungen der Lebensformen unter Einwirkung der verlagsindustriellen Heimarbeit in einem ländlichen Industriegebiet (Zürcher Oberland) vor 1800*, Winterthur u.a. 1960 (2. Aufl., Göttingen 1979)
- Brunner, Otto. 1968. „Das ‘ganze Haus’ und die alteuropäische ‘Ökonomik’.“ Pp. 103-127 in id., *Neue Wege der Verfassungs- und Sozialgeschichte*. 2nd ed. Göttingen.
- Bulst, Neithard / J. Hoock. 1981. ‘Volkszählungen in der Grafschaft Lippe. Zur Statistik und Demographie in Deutschland im 18. Jahrhundert’, in N. Bulst / J.Goy / J. Hoock ed., *Familie zwischen Tradition und Moderne. Studien zur Geschichte der Familie in Deutschland und Frankreich vom 16. bis zum 20. Jahrhundert*. Göttingen, , 57-87.
- Cerman, Markus / H. Zeitlhofer (ed.). 2002. *Soziale Strukturen in Böhmen. Ein regionaler Vergleich von Wirtschaft und Gesellschaft in Gutsherrschaften, 16-19. Jahrhundert*. Wien

u.a.

- Conze, Werner (ed.). 1976. *Sozialgeschichte der Familie in der Neuzeit Europas*. Stuttgart.
- Derks, Hans. 1996. "Über die Faszination des ‚ganzen Hauses‘." *Geschichte und Gesellschaft* 22: 221-242.
- Duhammelle, Christophe / J. Schlumbohm (ed.). 2003. *Eheschliessungen im Europa des 18. und 19. Jahrhunderts: Muster und Strategien*. Göttingen.
- Dürr, Renate. 1995. *Mägde in der Stadt. Das Beispiel Schwäbisch Hall in der Frühen Neuzeit*. Frankfurt a.M. u.a.
- Egner, E. "Epochen im Wandel des Familienhaushalts." In: F. Oester (ed.), *Familie und Gesellschaft*. Tübingen 1966.
- Ehmer, Josef u.a. (Hrsg.). 1997. *Historische Familienforschung. Ergebnisse und Kontroversen*. Frankfurt a.M. u.a.
- Fertig, Georg. 2003. "The invisible chain: Niche inheritance and unequal social reproduction in preindustrial continental Europe." *The History of the Family* 8-1: 7-19.
- Frumkin, Peter / G. Kaplan. 2000. "Institutional Theory and the Micro-Macro Link". (Working Paper)
- Gleixner, Ulrich. 1994. "Das Mensch" und "der Kerl". *Die Konstruktion von Geschlecht in Unzuchtverfahren der Frühen Neuzeit, 1700-1760*. Frankfurt a.M. u.a.
- Gremel, M. 1983. *Mit neun Jahren im Dienst. Mein Leben im Stübl und am Bauernhof 1900-1930*. Wien
- Greyerz, Kaspar von / H. Medick / P. Veit (ed.). 2001. Von der dargestellten person zum erinnerten ich: Europäische

Selbstzeugnisse als historische Quellen (1500-1850). München.

- Groebner, Valentin. 1995. "Außer Haus. Otto Brunner und die ‚alteuropäische Ökonomik.‘" *Geschichte in Wissenschaft und Unterricht* 46-2: 69-80.
- Haacke, Heinrich. 1911. Barmens Bevölkerung im XVII. und XVIII. Jahrhundert, unter besonderer Berücksichtigung der Volkszählung vom Dezember 1698 nach zeitgenössischen Urkunden dargestellt . Barmen.
- Habermas, Jürgen. 1961. *Strukturwandel der Öffentlichkeit. Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft*, Neuwied 1962.
- Hareven, Tamara K. 2000. Families, history and social change. Life-course & cross-cultural perspectives. Westview Press.
- Harms-Ziegler, Beate. 1990. Illegitimität und Ehe. *Illegitimität als Reflex der Ehediskurses in Preußen im 18. und 19. Jahrhundert*. Berlin.
- Iida, Takashi. 2003. "Wiederheiraten und Verwandtschaftsnetze auf dem unteilbaren Hof: Bauern, Büder und Einlieger des brandenburgischen Amtes Alt-Ruppin im 18. Jahrhundert." Pp. in Duhammelle, Christophe / J. Schlumbohm (ed.). 2003. *Eheschliessungen im Europa des 18. und 19. Jahrhunderts: Muster und Strategien*. Göttingen.
- Institut für Wirtschafts- und Sozialgeschichte. Universität Wien (ed.). 1997. *Wiener Wege der Sozialgeschichte. Themen-Perspektiven-Vermittlungen*. Wien u.a.

- Jeggle, U. 1977. *Kiebingen - Eine Heimatgeschichte. Zum Prozeß der Zivilisation in einem schwäbischen Dorf*. Tübingen.
- - / A. Ilien. 1978. *Leben auf dem Dorf. Zur Sozialgeschichte des Dorfes und Sozialpsychologie seiner Bewohner*. Opladen.
- Kaschuba, W./C. Lipp. 1982. *Dörfliches Überleben. Zur Geschichte materieller und sozialer Reproduktion ländlicher Gesellschaft im 19. und frühen 20. Jahrhundert*. Tübingen.
- Kisch, Herbert. 1972. "From monopoly to Laissez faire: The early growth of the Wupper valley textile trades." *The Journal of European Economic History* 1-2: 298-407, later pp.162-257 in *Die hausindustriellen Textilgewerbe am Niederrhein vor der industriellen Revolution* (Göttingen 1981).
- Knodel, John. 1974. *The decline of fertility in Germany, 1871-1939*. Princeton: Princeton University Press.
- -. 1988. *Demographic behavior in the past. A study of fourteen village populations in the eighteenth and nineteenth centuries*. Cambridge.
- Kocka, Jürgen u.a. 1980. *Familie und soziale Plazierung. Studien zum Verhältnis von Familie, sozialer Mobilität und Heiratsverhalten an westfälischen Beispielen im späten 18. und 19. Jahrhundert*. Opladen.
- Kriedte, Peter. 1991. *Eine Stadt am seidenen Faden. Haushalt, Hausindustrie und soziale Bewegung in Krefeld in der Mitte des 19. Jahrhunderts*. Göttingen.
- Krusenstjern, Benigna von / H. Medick (ed.). 1998. *Zwischen Alltag und Katastrophe: Der Dreissigjährige Krieg aus der Nähe*. Göttingen.
- Leboutte, Rene (ed.). 1996. *Proto-industrialization: Recent research and new perspectives*. Librairie Droz.
- Lüdtke, A. 1989. *Alltagsgeschichte. Zur Rekonstruktion historischer Erfahrungen und Lebensweisen*. Frankfurt a.M.
- Matsumura, Takao. 2003. "An epistemological genealogy of social history - From Giambattista Vico to Jules Michelet and to Lucian Febvre -." *Mitta Gakkai Zasshi* 96-3: 41-69. (In Japanese)
- Medick, Hans. 1997. *Weben und Überleben in Laichingen 1650-1900. Lokalgeschichte als Allgemeine Geschichte*. 2. durchgesehene Auflage. Göttingen.
- - / J. Schlumbohm/ P. Kriedte. 1977. *Industrialisierung vor der Industrialisierung. Gewerbliche Warenproduktion auf dem Lande in der Formationsperiode des Kapitalismus*. Göttingen.
- - / A.-C. Trepp (ed.). 1998. *Geschlechtergeschichte und allgemeine Geschichte: Herausforderungen und Perspektiven*. Wallstein Vlg., GW.
- - / P. Schmidt (ed.). 2003. *Luther zwischen den Kulturen: Zeitgenossenschaft - Weltwirkung*. Göttingen.
- Mendels, Franklin F. 1972. "Proto-industrialization: the first phase of the industrialization process." *Journal of Economic History* 32: 241-61.
- Mitterauer, Michael. 1979. *Grundtypen alteuropäischer Sozialformen. Haus und Gemeinde in vorindustriellen Gesellschaften*. Stuttgart.

- -. 1983. *Ledige Mütter. Zur Geschichte illegitimer Geburten in Europa*. München.
- -. 1986. *Sozialgeschichte der Jugend*. Frankfurt a.M.
- -. (ed.). 1987. "Gelobt sei, der dem Schwachen Kraft verleiht". *Zehn Generationen einer jüdischen Familie im alten und neuen Österreich*. Wien.
- -. 1990. *Historisch - anthropologische Familienforschung. Fragestellungen und Zugangsweisen*. Wien.
- -. 1992. *Familie und Arbeitsteilung. Historisch vergleichende Studien*. Wien.
- - / R. Sieder. 1977. Vom Patriarchat zur Partnerschaft. Zum Strukturwandel der Familie. München. (4. Aufl. 1991)
- - / R. Sieder (ed.). 1982. *Historische Familienforschung*. Frankfurt a.M.
- - / J. Ehmer (ed.). 1986. *Familienstruktur und Arbeitsorganisation in ländlichen Gesellschaften*. Wien u.a.
- Murayama, Satoshi. 1990a. *Konfession und Gesellschaft in einem Gewerbezentrum des frühneuzeitlichen Deutschland: Das Wuppertal (Elberfeld-Barmen) von 1650 bis 1820*. Tokyo: Keio Tsushin.
- -. 1990b. "Micro-macro link in historical demography." *Mita Gakkai Zasshi*. 83-1: 176-190. (In Japanese)
- -. 1995. *Kinsei Youroppa Chiiki-shi-ron* (= Regional history of pre-industrial Europe). Kyoto: Horitsu-Bunka-Sha. (In Japanese)
- -. 1999. "Regionalismus in der Geschichte der Familie. Die Frühneuzeit in Japan und Deutschland im Vergleich." *Deutschstudien* 29: 106-120.
- -. 2001. "Regional standardization in the age at marriage. A comparative study of pre-industrial Germany and Japan." *The History of the Family* 6-2: 303-324.
- -. 2003. "Family property in a German pre-industrial community. An economic transition." (Paper presented at the 28th Annual Meeting of the Social Science History Association in Baltimore, Nov. 13-17, 2003)
- -. 2004. "Inhabitants in comparative perspective. Religious registration and population registers." (Paper presented at the 5th European Social Science History Conference in Berlin, Mar. 24-27, 2004)
- Opitz, Claudia. 1994. "Neue Wege der Sozialgeschichte? Ein kritischer Blick auf Otto Brunners Konzept des ‚ganzen Hauses‘." *Geschichte und Gesellschaft* 20: 88-98.
- Pfister, Ulrich. 1992. *Die Zürcher Fabriques. Protoindustrielles Wachstum vom 16. zum 18. Jahrhundert*. Zürich.
- Rosenbaum, H. 1974. *Familie und Gesellschaftsstruktur. Materialien zu den sozioökonomischen Bedingungen von Familienformen*. Frankfurt a.M. (2. erweiterte Aufl. 1979)
- Sabean, David W. 1986. *Das zweischneidige Schwert. Herrschaft und Widerspruch im Württemberg der frühen Neuzeit*. Berlin.
- -. 1990. *Property, Production and Family in Neckarhausen 1700-1870*. Cambridge et al.
- Schlumbohm, Jürgen. 1994. *Lebensläufe, Familie, Höfe. Die Bauern und Heuerleute des Osnabrückischen Kirchspiels Belm in proto-industrieller Zeit, 1650-1860*. Göttingen.
- Sieder, Reinhard. 1987. *Sozialgeschichte der*

- Familie*. Frankfurt a.M.
- Trossbach, Werner. 1993. "Das 'ganze Haus' – Basiskategorie für das Verständnis der ländlichen Gesellschaft deutscher Territorien in der Frühen Neuzeit?" *Blätter für deutsche Landesgeschichte* 129: 277-314.
 - Veichtlbauer, Ortrun. 2004. ([Http://www.univie.ac.at/igl.geschichte/brunner/veichtlbauer_text.pdf](http://www.univie.ac.at/igl.geschichte/brunner/veichtlbauer_text.pdf)) "Ringvorlesung Umweltgeschichte Jänner 2004: Das Problem der Mikrostudie – eine interdisziplinäre Perspektive." Internetgestützten Lehre (IGL) des Instituts für Geschichte der Universität Wien.
 - Wakao, Yuji. 1993. "Kaisetsu Doitsugo-ken no Rekishi-Kazoku-Kenkyu to Vienna Group." Pp. 189-215 in: M.Mitterauer / R.Sieder, *Yo-roppa Kazoku Syakai-shi*. Nagoya-Daigaku-Syuppan-Kai. (In Japanese)
 - -. 1998. "Bunken-Kaidai. Doitsugo-ken no Kazoku-shi-Kenkyu." Pp. 266-278 in: J. Wakao u.a., *Kazoku, Minerva-shobou*.(In Japanese)
 - Weber-Kellermann, Ingeborg. 1974. *Die deutsche Familie. Versuche einer Sozialgeschichte*. Frankfurt a.M.
 - Wierling, Dorothee. 1987. *Mädchen für alles. Arbeitsalltag und Lebensgeschichte städtischer Dienstmädchen um die Jahrhundertwende*. Bonn.